

## 平塚らいてうと旅

堀 恵 子

大阪教育大学教養学科欧米言語文化講座

(平成7年4月28日 受付)

平塚らいてうの名は、日本における女性解放の歴史の中で今も変わらぬ光を放っている。女性の手による文芸雑誌『青箱』の発行や新婦人協会の設立、「若い素」と呼ばれた奥村博との共同生活、与謝野晶子との「母性保護論争」と、らいてうの首動は常に世の人々から非難と賞賛で迎えられた。本稿では、そのらいてうと旅という、これまであまり注目されなかったテーマを取り上げ、彼女にとって旅とは何であったか、旅が彼女にどんな影響を与えたかを考察し、平塚らいてうという偉大な人物の全体像を把握する一助としたいと思う。なお本稿でいう旅には転地療養などの比較的長期間の滞在も含まれている。らいてうは1923年、千駄ヶ谷の路地裏の僧家で関東大震災に遭遇するが、本稿では大震災以前の旅を主として扱っている。

キーワード：文学、平塚らいてう、旅、自然

### I

東京の麹町区（現在の千代田区）三番町に生まれ、小学校三年の時、本郷駒込曙町に引越した平塚らいてうが、初めて海らしい海を見たのは、お茶の水高等女学校に入学した年の夏のことであった。お台場の並ぶ東京湾しか見たことのないらいてうにとって、相州葉山の海の印象は強烈なものだったようだ。その時の衝撃を彼女は次のように書いている。

今見ればあの静かな——小さな波がむしろ退屈そうに終日岸に寄せているあの御用邸下の箱庭式の海が、まあ何という大自然の威力をもって幼いわたくしの全存在を圧倒したことでしょう。（中略）一浪去っては一浪くるこの休みのない生きものの海のからだをじっと見ていると何かしら全宇宙を支配する生命力とでもいうようなものがわたくしのからだ中に伝わってきて両脚がわなわなとふるえてきました。<sup>1)</sup>

また、らいてうの山への最初の憧れは富士登山への熱望という形で現れている。彼女は富士山を日本一、いや世界一の霊峰と信じて、富士山に関する文献を手当たり次第集め、富士登山計画を密かに練っていたのだった。しかしこの計画も、そんなところは女や子供の行く所ではないという父の一言で、実現の見込みはなくなってしまったのである。彼女は当時を振り返って、「日本地図を拡げてみて、あちらへもこちらへも行こうと思っていたところをみると、富士への憧れは、旅行への憧れの変形だったのかもしれない<sup>2)</sup>と

述べている。この計画の挫折は、らいてうに自分が女性であることを強く意識させ、父への反抗心を芽生えさせただけでなく、彼女の旅への希求をさらに強いものにしたのに違いない。

年ごとに官僚色が濃くなる父との断絶をらいてうがはっきりと意識したのは日本女子大学在学中に、静養中の父とともに過ごした小田原海岸の旅館でのことだった。

久しぶりに、父とふたりきりになり、旅館の一室に向き合ってみると、いまさらのように父との距離を感じます。女学校のなかごろまではあんなに親しんでいた父に対して、なにも話すこともなく、また、自分の内面の問題などは、話しても理解してもらえまいと思えば話す気にもなれない自分の気持の変化を、じっと見つめないではいられないのでした。<sup>3)</sup>

女子大卒業後、らいてうは禅の修行、英語の勉強を続ける傍ら、生田長江の取り持ちで始まった若い女性ばかりの文学研究会、闊秀文学会に入会するが、その講師の一人が森田草平であった。妻子を郷里に置き、別の女性と同棲していた草平とらいてうの塩原温泉奥の雪深い峠への逃避行は、駆け落ち、心中未遂の塩原事件として世の注目を浴びることになり、これをもとに草平の小説『煤煙』が書かれ、らいてうは女子大から除名処分を受けたのだった。この事件の波紋の広がるなか、らいてうは一人、信州へと旅立った。以前から憧れていた日本アルプスの壮大な自然に囲まれた養鯉所の奥座敷に滞在した数か月は、山々の散策と読書、座禅に明け暮れる毎日であったという。後に『青鞥』に掲載された「高原の秋」は、この信州滞在中に書き始めた原稿に手を加えて書き上げたものである。そこには次のような描写が見られる。

天地に塞がる大傾斜、大豁谷、無限から、無限に、無辺無際を敵める空線、これらはもうそれながらの自然が絶妙不巧の一大芸術で、万人の心を威圧し、驚異と、崇高と、荘厳と、畏敬とを、無言にして日に日に新たに強いねば止まぬ。(中略) 太初、茫漠の山野に住んだ原人は何らのこざかしき思念を挟むことなしに日輪、山岳、大洋、大河、森林などに対して我知らず跪いたのである、その自然崇拜時代の厳肅な、敬虔な人間本来の純粋相をこの虚偽な曖昧なまやかき多き今日の世にまだ多少でも失わずして生きていられた自分を、私は心に謝さないでどうしていられよう。<sup>4)</sup>

ああ、高嶺の万年雪！私の胸はたちまち躍った。……やはり私は雪で死にたい、日本アルプスの雪で——今まで見たありとあらゆるものの中で、一番印象の深い、強い、暗示的な、神秘的な、いつ見ても清新で、自由で、魔力のある日本アルプスのその頂のあの神聖な万年雪で。

雪は私の生命である。<sup>5)</sup>

晩年のらいてうは「わたくしの短い信州滞在はたとえ一時の逃避行にすぎなかったにしても、なにものにも妨げられず静かな生活、美しい自然の深い懐のなかで、つくづく独居のよさを味わせてくれました」<sup>6)</sup>とこの旅から得られた癒しと充足感を懐しく思い起こしている。

東京に戻り、座禅と英語と図書館通いの毎日を送るらいてうは、やがて生田長江の強い

勧めもあって、女性ばかりの文芸雑誌『青鞥』を発行することになる。「山の動く日来る」で始まる与謝野晶子の巻頭詩「そぞろごと」、発刊の辞にかえたらいてうの「元始、女性に太陽であった」を載せた『青鞥』創刊号はたちまち大きな反響をよんだ。

この『青鞥』時代に、らいてうは後に彼女の夫となる奥村博と出会った。その二人が初めて結ばれたのは、らいてうが博を誘って旅した新緑の赤城山中の湖心の小さな島であった。

輝く太陽、蒼い空、野鳥の囀りや花と森の香り、標高千三百余メートルの展望と鏡のような山上の湖。このあまりにも壮大な大自然の無限のふところのなかで、求め合っていたふたりの若い魂が、一つの命にはじめて結ばれることに、なんの儀式が必要でしょう。滑かな湖の上に、小舟を浮かべたふたりは「小鳥ヶ島」とよぶ湖心の小さな島に、太古のもののような厚い苔や羊歯類の密生する緑のその島に、永遠の愛の証しを残すことをためらいませんでした。<sup>7)</sup>

太古から変わらぬ荘厳な大自然はらいてうに自分の心に正直に行動するエネルギーを与えてくれたのだ。

やがて、らいてうは家を出て、婚姻届を出さないまま博との共同生活を始めるようになるが、新しい生活に入ってからさまざまな問題で心身ともに疲労した時、西伊豆の土肥温泉に二人で旅をしている。この時の様子をつづったのが『青鞥』誌上に載った「旅の七日間」である。

あらゆるものを全体として感じ、味わうことができなくなると、私は自分の内生活の弛緩、墮落、自我の縮小を感じてたまらないほど不安になる。その時私はいつも心に旅へ、旅へと叫ぶ。(中略) 自然と向い合っていると私は次第に興奮してくる。その興奮によって私の心は洗われる。そして純粋になり、新鮮になり、透明になり、いつか情熱的に自然の中にはいっていく。(中略) 私はこの心境が——静かにのほり詰めたこの心境がたまらなく好きだ。波の音、風の声、鳥の囀り、総ての現象が皆全宇宙そのものを直接自分に見せてくれる。感じさせてくれる。味わせてくれる。私はこうして息苦しさから救われる。昔の人たちが法心などと呼んだ心を再び自分に取戻す。

自分のこういう心境がわけもなく尊く感じられた時、私は都会にいた昨日までの自分を馬鹿馬鹿しいものに思った。<sup>8)</sup>

この部分には、どのような状態の時にらいてうが旅に出て、それによっていかに心洗われ、苦悩から解放され、心の平安を取戻すことができるかが明白に示されている。

その後、『青鞥』発行部数が減少して欠損が続き、保持研子の帰京により『青鞥』に関する一切の仕事を背負いこむことになったらいてうは、疲労のために頭の圧迫や頭痛に悩まされるようになるが、この時も旅に救いを求めている。山と海に囲まれた御宿海岸で、強い日差しのなか、かわいい千鳥を眺めながら、らいてうは博とともに心静かな時を過ごすことができたのである。しかしこの旅は重大な決意の旅でもあった。博との新しい生活と『青鞥』に関する全責任という二つの事柄の両立が難しいと分っていたながら仕事に専念することは自分を偽ることになり、生命を磨り減らすことになるのではないかと悩んだ末に彼女が出した結論は、『青鞥』を廃刊とし、後日、適切な時に別な形で、女性の問題を

中心にした思想雑誌として再出発すればよいというものであった。しかし、留守を任せた伊藤野枝の強い要望により、結局は『青鞥』の発行権を野枝に譲るという形になっている。

その後、博が肺結核治療のため茅ヶ崎の病院に入院するが、らいてうも第一子出産の後、茅ヶ崎に移り、第二子出産のため東京に戻るまで、二年間をそこで過ごしている。『青鞥』は五年間の歴史を通してその役割をすでに果たしたと感じたらいてうの中に、茅ヶ崎で生活する間に次に何かしなければならないという気持ちが芽生え育っていった。

そして東京に戻って第二子を出産した後、与謝野晶子との「母性保護論争」を経て、女性の立場からの社会改革の必要性を痛感したらいてうは、真の女性解放への第一歩として女性の参政権問題を考え始めたのである。こうして生まれたのが新婦人協会であった。新婦人協会は治安警察法第五条修正、花柳病者に対する結婚制限並びに離婚請求、衆議院議員選挙法改正（婦人参政権と男女の普通選挙要求）の請願書の提出と、積極的な対議会運動を展開した。このうち治安警察法第五条修正案のみ多くの困難を乗り越えて1922年に改正施行され、政談集会への参加、およびその発起人となるのが女性にも認められるようになったのである。しかし、この時らいてうは過酷な対議会運動、講演会、専売局「女工」のストライキの交渉などによる心身の疲労から健康を損ない、上総竹岡海岸を経て、栃木県那須温泉において転地療養中であった。中心人物を失った協会は治安法改正施行後まもなく内部分裂を起こし、らいてうはやむなく協会の解散を決意することになる。またしても旅先でこのような重大な決定をせざるをえなくなったのだ。新婦人協会の解散は、先頭に立って一人責任を負わされたらいてうに、日本にはまだ女性大衆としての動きや民主組織がなく、団体運動に対する女性の訓練もまだできてはいないという事実を痛感させることになった。

さて、二年にわたる竹岡海岸、那須温泉、塩原温泉、伊豆山での転地療養の旅が、らいてうと夫の心身を癒すのに果たした役割は大きかった。彼女は次のように書いている。「実際、こうして自然にひたり切って暮らす生活ほど、疲れはてたわたくしの身心を、癒してくれたものはありません。この旅の二年間で、奥村の頑固な湿疹は完全に治り、わたくしの健康も、前にくらべると、ずいぶん良い状態へと回復しました。」<sup>9)</sup>

また、この旅は健康の回復ということだけでなく、夫や子供たちとの生活の回復という意味においても重要な旅であった。

わたくしが過労のために、とうとう健康をそこねたことはある意味で子供たちにとっては仕合せなことでした。うれしいことでした。なぜならわたくしのすべての精力とすべての時間とを奪っていた協会からわたくしは再びいやおうなしに家庭へと戻されてきましたから。わたくしの頭は病床の中でも絶えず協会のさまざまな問題や責任感のために悩みつづけてはいましたけれど、からだだけはともかくも子供らの傍にいられるようになりましたから。<sup>10)</sup>

そして都市生活を逃れての旅の二年間は、子供たちの心身の成長にも大きな影響を与えたのだった。

またわたくしの病気はとうとうわたくしたち一家を都会生活からもういやおうなしに解放してくれました。ちょうど二年間の海に、山に、温泉に、田園における静かな生活は子供らにとっては、おそらく彼らの生涯の思い出となるであろうほど驚異に満ちた、たの

しい、印象深いものでした。彼らの心も身体もこの間に目に見えて生き生きと伸び育ちました。<sup>11)</sup>

子供たちが盛んに詩を作ったのもこの頃のことだったが、帰京後はバッテリーできなくなり、らいてうは「ほんとうに都会生活は自然の詩人である子供の魂をさえ枯渇させずにはおかないのでしょうか」<sup>12)</sup>と嘆いている。

らいてうが二年間の療養生活に終止符を打って東京に戻る決心をしたのは、他の一般の小学校のように国定教科書を使用せず、生徒数が少なく、より自由な教育が受けられると信じた成城小学校へ子供たちを入学させるためであった。成城小学校での教育に全体として満足していたものの、自然に囲まれた田舎生活で子供たちが身につけた生命力や個性が都会生活の中で失われていくのを見るのは、らいてうにとってつらいことだったようである。

ほんとうに自然という何ものにもかえがたい良教師を失った子供の損失は優れた教育ぐらいいで償えるものではないでしょう。子供の知っている文字の数が多くなればなるほど、子供がもつ知識の分量が増せば増すほど、彼らの生命は眠り、その個性は光を失っていくのではないかとさえ疑われるくらいです。<sup>13)</sup>

らいてう自身も、帰京後、都会生活の煩わしさの中で、二年間の田舎での生活を心から懐かしみ、さらなる旅を希求している。

わたしの心もこのごろしきりに旅を思う。すべてをふり捨ててこだわりのない、軽いのびやかな心で旅から旅へと歩きまわりたい。(中略)子供の教育の問題でさんざん迷ったあげく別れがたい山や、雲や、森や、水に別れて、ただ子供らの学校のためばかりに帰りたくもない東京へ帰ってきたものの、都会の生活が一日一日といやになるばかりだ。それにしても那須野の自然にひたりきっていた一昨年の今時分、伊豆の海から昇る朝日を毎朝温泉をあみながら見入っていた昨年の今時分をつくづくよかったと思う。<sup>14)</sup>

しかし、らいてう一家が旅先であまり金銭の苦勞もなく心身を癒し、生活を楽しむことができたのは、博史(姓名判断により、博から改名)のフランス留学のためにとっていたお金を流用したからであって、家族が滞在した田舎に住む人々、ことに女性の生活はそのように余裕のあるものではなかったのだ。この村では、よき働き手はこの家でも主人ではなく主婦であり、男性は一家の権力者としてわがままで、たいてい酒飲みで、少し余裕のある家の主人には愛人の噂が付き物であった。女性たちは田や畑で働くだけでなく、山へそだ伐りにさえ行っていた。ことに養蚕期の女性は眠る暇もないくらいの忙しさであった。彼女たちの口から「さしこみ」や「はらいた」などの言葉がしばしば聞かれ、若くして腰痛のために起き上がれない女性や、三十代で視力の弱っている女性も少なくなかった。このような農村女性の健康上の問題は、過労や下半身を冷やすことの多い仕事や、産後の静養期をもたないことなどのため、彼女たちに多少の婦人病の持病があるためではないかとらいてうは推測している。

らいてうに新婦人協会設立の決意を固めさせた理由のひとつに愛知県下の織機関係の工場で目の当たりにした「女工」たちの労働環境の劣悪さと寄宿舎生活の殺風景、不衛生な

どがあったが、そこで耳にした「女工」たちの「田舎で百姓するよりも工場で働く方が体が楽で、それにお金もとれる」<sup>15)</sup>という言葉が彼女には理解できなかった。しかし旅先で農村の女性たちと親しみを増すに従って彼女たちの重労働とそれに伴う健康上の問題に目を開かれることにより、ようやくこの「女工」たちの言葉にうなずけたのである。

## II

以上、関東大震災以前のらいてうと旅との関係を順を追って見てきたが、ここから次のようなことが推測される。

らいてうにとっての旅とは自然への回帰であり、そこで遭遇するすべての自然現象が全宇宙そのものを彼女に見せ、感じさせ、全宇宙を支配する生命力を吹き込んでくれるのであった。こうしてエネルギーを与えられたらいてうは、博との赤城山行きに見られるように、太古から変わらぬ大自然の懷に抱かれて、何も恐れることなく自分の心に正直に行動することができるのだった。

さらに旅はストレスのたまる都市生活からの逃避の場であり、疲弊した心身の癒しの場であった。塩原事件、『青鞥』編集の雑務に伴う疲労、「新婦人協会」時代の対談会運動、講演会、専売局「女工」のストライキの交渉などの疲労からくる自家中毒など、極度のストレスに見舞われた時、らいてうは必ず旅に救いを求めている。

また旅は彼女に、自分の心の変化を冷静に見つめ直し、心の整理をし、重大な決断をする場を提供してくれた。父と出かけた小田原海岸では、父との決定的な心の断絶を認識し、御宿海岸では『青鞥』の発行権を伊藤野枝に譲ることを決心し、転地療養中の塩原温泉では「新婦人協会」の解散を決意している。

さらに旅は、母となったらいてうにとって重要な意味を持っていた。彼女は就学前の子供を持つ母親に国家が十分な報酬を与えて、その間、母親が就労せずにすむようにするという母性保護思想の擁護者であった。多くの若い「女工」や働く母親、家庭にあって苦勞する母親の姿にふれ、彼女たちの母性を守るため、どうしてもじっとしていられなくなって始めた「新婦人協会」であったが、多くの女性たちの母性保護を獲得するために自分自身の母性が、我が子とのふれあいが犠牲になっていたのである。このジレンマは再三彼女を悩ませていた。皮肉なことに、らいてうは病に倒れることによって、幼い子供を持つ母親としての生活と家庭外での労働生活の両立の困難さを身を以て示すことになったわけだが、その結果、彼女は都市での多忙な生活から解放され、自ら選んだ旅の地の大自然の中で、幼い子供たちを夫とともに伸び伸びと育てる母としての喜びを十分味わうことができたのである。

旅はまた、らいてうにとって新たな飛躍のための思想的充電の場であったといえる。塩原事件後の信州への旅で、らいてうはそれまでの自分から脱皮し、座禅、読書、山の散策に明け暮れる日々を過ごしている。『青鞥』発刊の辞にかえた「元始、女性に太陽であった」の「日本アルプスの上に灼熱に燃えてくると廻転する日没前の太陽よ。孤峰頂上に独り立つ私の静けき慟哭よ」<sup>16)</sup>という一節が、信州滞在中に和泉の里から眺めた壮大な景観を記したものに他ならないと述べたのは小林登美枝であった。<sup>17)</sup> りいてうが禅の修行で培った精神と、常々彼女の中にあった自然崇拜に、信州への旅での壮大な自然とふれあう日々を経験が重なりあって、あの、人々の心を揺さぶる「元始、女性に太陽であった」が生み出されたといっても過言ではない。

さらに御宿海岸、茅ヶ崎滞在中に彼女は『青箱』以降の母性保護思想をはぐくみ始めていたし、竹岡海岸から伊豆山に至る転地療養の旅先では、子育ての経験を通して、また、この一見のどかな田園風景の中で繰り広げられる苛酷な人間模様を見聞することによって、自らの母性主義を後の消費組合運動へと発展させていく礎を形成していたのである。

さて、らいてうの旅への憧れは、まず富士登山への熱望という形で現れ、常に山岳への強い憧れが彼女にはあったようだ。彼女が旅に出る時に、山に囲まれた地方を選ぶことが多かったのはそのためであろう。富士登山への夢が、女や子供の行くところではないという父の言葉で挫折に追い込まれて以来、彼女の中には女性であるがゆえに到達を阻まれている存在、それゆえ憧れ、切望するものとしての高山が常にあった。それを如実に示しているのが『青箱』発刊と同時につけられた「らいてう」というペンネームである。実はこのペンネームも、塩原事件後の信州への旅に由来しているのである。日本アルプスへの登山が容易ではなく、女性の登山者などいない時代のことで、らいてうは信州滞在中も生きた雷鳥のひな鳥を見ただけであったが、書物を通してこの鳥の習性を知り、好ましく思ったということである。太古から三千メートル以上の高山に住み、ふっくらとしたやさしさとたくましさを合せ持つ雷鳥。季節によりからだの色を変えることにより山の自然と同化する雷鳥。らいてうは長い歴史を生き続けてきたこの鳥の生命力、そして何よりも、女性である自分が到達しえない高所に住み、自然の中に溶け込んでいるという事実に強く心引かれたのであろう。信州滞在中に書き始められた「高原の秋」には、自分が純白の羽毛で覆われた雷鳥に姿を変え、太陽の周囲を三度回るといった幻想のシーンが描かれている。

## 結

以上のように、ペンネームの由来も含め、らいてうと旅は常に密接な関係にあった。らいてうにとって、都市は人々を疲弊させ、自然の詩人である子供の魂さえも枯渇させてしまう所であるが、病院や学校などの施設が充実しているために、出産や子供の教育問題に直面した時、帰らざるをえない場所であった。しかし「断想」の中の「現代人は社会のなかに生きていることを知っているが、自然のなかに生きていることを忘れている」「都市生活者は自分の頭の真上に悠久な青い空のあることを時々思い出す必要がある」という二文からも明らかなように、らいてうは都市生活者の自然とのふれあいの必要性を痛感していた。彼女が都市生活者のさまざまな苦難を経験しながらも、母性主義を擁護して女性の地位向上にあれほど大きな貢献ができたのも、都市生活のすぐむこうに、いつでも迎えてくれる自然への回帰の旅があるとの確信があったからではないだろうか。

本稿では関東大震災以前のらいてうの旅を取り上げたが、彼女と旅のこの関係が終生変わらないものであったことを明らかに示す、小林登美枝の描いた晩年のらいてうの姿を紹介して結びとしたい。

時たま旅に出られて、広い田園風景のなかを車で走るときなど、「まあ、なんて広い空でしょう——」と、みどりの地平のかなたを眺めながら、感にたえないように言われます。そんなときの先生の眸の奥には、はるかな人生の地平線をつめて、永遠に憧れやむことのない情念のようなものが宿っているかのようでした。<sup>10)</sup>

## 註

- 1) 平塚らいてう (1983) 平塚らいてう著作集 大月書店 東京 4巻 345頁 (以下, 著作集と記す)
- 2) 平塚らいてう (1992) 平塚らいてう自伝: 元始, 女性は太陽であった 大月書店 東京 1巻 139頁 (以下, 自伝と記す)
- 3) 自伝 1巻 184頁
- 4) 著作集 1巻 55頁
- 5) 著作集 1巻 59頁
- 6) 自伝 1巻 285頁
- 7) 自伝 2巻 146頁
- 8) 著作集 1巻 336-337頁
- 9) 自伝 3巻 242頁
- 10) 著作集 4巻 59頁
- 11) 著作集 4巻 59頁
- 12) 著作集 4巻 61頁
- 13) 著作集 4巻 61頁
- 14) 著作集 4巻 73-74頁
- 15) 自伝 3巻 242頁
- 16) 著作集 1巻 21頁
- 17) 小林登美枝 (1977) 平塚らいてう——愛と反逆の青春 大月書店 東京 211頁
- 18) 自伝 2巻 300頁

## Hiratsuka Raicho and Her Travels

Keiko Horn

*Course of European and American Languages and Cultures**Department of Arts and Sciences**Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582, Japan*

To get a better understanding of Hiratsuka Raicho, one of the first major feminists in Japan, this paper focusses on the relationship between Raicho and her travels. This virtually un-discussed theme leads to the following conclusions. For Raicho, to travel meant to go back to nature, from which she gets life energy which rules the whole universe. These travels also provided her an escape from stressful city life. They offered her an opportunity to gather her thoughts and to make important decisions. They enabled her to enjoy the pleasure of being a good mother and wife in the grandeur of nature. Furthermore, each journey prepared her for the next step in her life. Her invigorating address to the readers of *Seito*, "In the Beginning, Woman Was the Sun" was created from the combination of her natural admiration of nature, spiritual maturity cultivated



through ascetic practices of Zen, and her trip to the mountainous region in Shinshu. This trip also produced her pen name, Raicho.

To Raicho, a city was a place where she needed to come back for its facilities — better schools and medical care. Even with all the problems of living in a city, Raicho could still contribute a great deal to raising women's position in Japan, because she knew she could go back to nature whenever she felt the need, nature which she was certain would receive her with open arms.

**Key Words:** literature, Hiratsuka Raicho, travel, nature